令和3年度「土砂災害防止に関する絵画･作文」作文中学生の部 県知事賞 優秀賞

「　僕たちが忘れてはいけないこと　」

鹿児島県　鹿児島市立鹿児島玉龍中学校　２年　濱田（はまだ）　卓志（たかし）

令和３年７月３日午前10時半頃、静岡県の熱海市で、今までに死者が22人、行方不明者が６人も発生した衝撃的な土砂災害があった。当時、日本は西日本から東日本にかけて停滞する前線に向かって暖かく湿った空気が次々と流れ込んでおり、大気の状態が非常に不安定になっていたため、東海地方から関東地方南部を中心に記録的な豪雨となっていた。勿論、熱海も例外ではなく、記録的大雨を記録していた。そして、７月３日午前10時半頃、その土砂災害は起こってしまった。住宅131棟がその土砂災害によって半壊、もしくは全壊してしまったのだ。このように熱海の街に壊滅的な被害をもたらした土砂の大半は何と、山の谷間にできていた開発による「盛り土」だった。土石流の土砂の総量は約５万55㎥で、多くの住宅などを巻き込みながら流下していく様子は、国内外のメディアで大きく報じられた。僕もその日、この土砂災害のニュースを見たとき、とても大きな衝撃を受けた。土砂が住宅地を流下していく様子は、まるでこの世のものとは思えず、これまでに僕がニュースで見た地すべりの中では最大規模のものだった。

日本における土砂災害の件数は、何と１年間に1319件にものぼっている。つまり、いつどこで発生するか分からないのだ。僕はこれらの土砂災害が身の回りで発生したときにどのようにしたら自分の身を守れるのか、そしてどのような対策がされているのかをいろいろと調べてみた。どのような対策がされているのか。１つ目に挙げられるのは法枠工だ。法枠工というのは、崖くずれの危険がある斜面をコンクリートの枠で押さえることでくずれにくくする工事のことである。多くの場合、１つの１つの枠の中に、芝や木などの植物が植えつけられる。これは、草や木などが生えていない斜面は、雨の力で土がけずり取られたり、ひびが入ったりして、くずれやすくなってしまうが、表面を草や木でおおうことによって、雨が降っても、直接地面に雨が当たらず、くずれにくくなるからである。２つ目に挙げられられるのは、擁壁工だ。擁壁工というのは、がけくずれの危険がある斜面を、コンクリートの壁で押さえたり、くずれてくる土砂を受け止める壁や柵を斜面から少し離れたところにつくったりする工事のことである。でも、法枠工も擁壁工も、あくまで自分たちがもしものときに、急に備えられるものではない。自分たちがもしものときのために行動するための策は主に３つあると僕は考える。１つ目の策は、日頃から、ハザードマップを確認しておくことである。ハザードマップとは、河川の氾濫、堤防の決壊、土砂災害などの被害を最小限にくい止めることを目的として、被害が予想される区域や避難場所、避難経路などの各種情報を誰が見ても分かりやすいように地図上に表したものだ。日頃から避難場所や避難経路を把握しておくことで、もしものときに、被害が少しでもおさえられるのではないだろうか。

２つ目の策は、梅雨や豪雨のときは、土砂災害の前兆現象に敏感になることである。土砂災害の主な前兆現象としては、地鳴りや山鳴りがする、沢の水が急に濁ったり、渓流の流れに流木が混ざる、雨が降り続いているのに渓流の水が急に減る、焦げ臭いにおいがしたり、渓流の中で火花が散る、山の斜面に亀裂が発生する、山の斜面から小礫がパラパラと落ちてくる、木がバキバキと裂けるような音がする、樹木、電柱、墓石などが傾く、など様々で、特に、大雨が続いているときはいつも以上に周囲に敏感になることが大事だと思う。

３つ目の策としては、自然災害が起こったときのために、非常食などの準備をしておくことである。これは、土砂災害だけでなく、その他の様々な災害にも共通している。やはり、自然災害は、日頃からの備えが大切なのではないだろうか。

このように、自然災害は、いつ、どこで起こるか分からない。でも、日頃から備え、意識し、シミュレーションしていると、被害はおさえられる。熱海の教訓を生かして、今の自分たちにできるのは、日頃からの備えだと身をもって感じた。「今、突然自然災害が起こるかもしれない」と杞憂に過ぎない程の覚悟を持って生きていきたいと僕は思う。日頃からの備えで命は守れる。そのことを皆さんも忘れないでほしい。